

最高学部

「指導の記録」

永野馨 武田若菜

I. はじめに

外部での4年に一度の音楽会は30回目を数えるが、最高学部だけによる演奏は今回が初めてだった。「オーケストラとの共演」「60名の合唱」「最高学部にふさわしい宗教曲」という条件の中、選曲に苦労した。最終的にアリエル・キンターナ作曲『2つの世界よりミサ曲』の中から「キリエ」「グローリア」に決定した。キンターナは、アルゼンチン出身の現代の作曲家である。メールで本人とコンタクトをとり、オーケストラの楽譜を取り寄せたりする内に、オーケストラによる演奏は日本初演であることがわかった。大きなプレッシャーと期待感の中で練習をスタートした。

II. 練習と実際

キンターナは現代の作曲家であるため、リズムや音(和音)がとても面白い構造で、予想を超えた和音進行やリズムが度々登場する。そのため、女声と男声に部屋を分かれての音取り練習を繰り返した。歌詞はラテン語で、それほど読み方や意味に苦労することはなかったが、リズムが複雑なためうまく歌詞が乗り切れず、リズム通りの歌詞音読練習にもかなり時間をかけた。その上、曲の途中で拍子が幾度となく変わることも難しさに拍車をかけた。

「キリエ」はほとんどがア・カペラで、1フレーズの終わりにハーブが入り、曲の最後の数小節でオーケストラが入る曲構成だ。時々入るハーブと合唱の音程が合わず、何度となく皆の心が折れそうになった。

夏休み明けからお昼休みのわずかな時間を使って自主練習も始めた。忙しい合間を縫って男子部、女子部の教師もほぼ毎日指導に赴き、学生たちも練習に真剣に取り組む日が続いた。

学生たちの気持ちはまとまってきていたが、現実はなかなか甘くはなく、音程が合う時もあれば、全く合わない時もあり、指揮者の梅田先生から厳しい声が飛ぶ日もあった。予断を許さない状態で本番当日を迎えた。

学生たちの緊張もあってか、本番当日のゲネプロのア

カペラはまったくうまく行かなかった。梅田先生も何度もトライしてくださったが、それでも合わなかった。とうとう音程が合わないままゲネプロが終わってしまった。「このまま本番を迎えるわけにはいかない」という気持ちは皆同じだったが、重い空気の中、ハーブ奏者の先生が「学部の練習室へハーブを移動して練習してみましよう。ハーブの音が聞きとりにくかったのかもしれないから。」と、申し出てくださった。大きなハーブを舞台から学部の練習室へ移動し、焦る学生たちに「この位置だとハーブの音が聴こえるかしら？」と、いろいろ試してくださった。何ヶ月間も練習してきたので、これ以上どうしたらよいかかわからない状況の中にいる学生たちに、ハーブ奏者の先生が新しい息を吹きかけてくださった。そのことで皆が再び立ち上がることができた。

いよいよ本番。ア・カペラからハーブが入る度に、合唱の音程もびったり合っており、そのような難しいフレーズが何回も繰り返されるが、難所はすべてクリアされ、美しいハーモニーが大ホールいっぱい広がった。のちに梅田先生から「音楽の女神・ミューズが降りてきたようでしたね。」と言われたほどの出来ばえであった。それに続く「グローリア」は、今までの全てを集約した演奏であった。

III. 終わりに

指揮をしてくださった梅田俊明先生、オーケストラの方々には、本番までたくさんのご迷惑とご心配をおかけしてしまいましたが、最後まで諦めずに指導して下さったからこそ、納得できる演奏をすることができた。きっとアリエル・キンターナも日本初演の学部の演奏を喜んでくれたに違いない。たくさんの方々のおかげで実現できたこの素晴らしい経験を、学部生たちが宝物としてくれることを願っている。